

2021年(令和3年)1月1日 金曜日

## フジコ・ヘミングさんが自伝 波乱の生涯 赤裸々に



自宅で飼っている猫を胸元に抱くフジコ・ヘミングさん  
(撮影・中島英雄さん)

「繊細じゃないと駄目。猫をなでるぐらいの繊細さがないと、きれいな音は出ない」と語るのは、ピアニストのフジコ・ヘミングさん。聴覚を一時

失うといった困難を乗り越え、遅咲きで成功をつかむまでの波乱の生涯を、自伝「奇蹟のピアニスト 人生哲学」やがて『鐘は鳴る』にまとめた。

幼少期の厳しいレッスンやいじめ、国籍の喪失、そして突然の病…。ヘミングさんは、自らに降りかかるたび難の数々を赤裸々につづる。1999年にテレビのドキュメンタリー番組に出演し、時代の人となるまでの半生は壮絶の一言だ。ただ、生活が苦しかった時も弱きものへの優しさは失わなかつた。近年もチャリティーコンサートをたびたび開催し、動物愛護団体などへの支援を続けていく。「私はクリスチヤン。少しでもいいから、得た収入で何かをしないと、神様に顔向けできない」

を猫を用いて例えたように、愛猫家として広く知られる。「しぐさを見ているだけで癒やされる。嫌な人と付き合うのは嫌だけど、猫は嫌なことがあっても憎めない」

新型コロナウイルス禍で2020年は公演の一部が中止、延期になつた。今後の抱負を問うと、「したいことはいっぱいあるけれど…。誰かが持つてきてくれた仕事を全うするだけですね」。音を通じ、これからも感動を届ける。双葉社刊、1980円。